

『言葉と物』 1966年

1961 L'Histoire de la folie à l'âge classique

『狂気の歴史』 田村俣訳、新潮社、1975年

1962 Maladie mentale et psychologie

『精神疾患と心理学』 神谷美恵子訳、みすず書房、1970年、新装版2016年

1954年の著作の第二部を大幅に書き換え、全体的に加筆して出版したのが本書。

1963 Naissance de la clinique

『臨床医学の誕生』 神谷美恵子訳、みすず書房、1969年、新装版2011年

1966 Les mots et les choses

『言葉と物』 渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、1974年、新装版2000年

1969 L'Archéologie du savoir

『知の考古学』 中村雄二郎訳、河出書房新社、新装版2006年

『知の考古学』 慎改康之訳、河出文庫、2012年

1971 L'ordre du discours

『言語表現の秩序』 中村雄二郎訳、河出書房新社、新装版1995年

『言説の境界』 慎改康之訳、河出文庫、2014年

1973 Ceci n'est pas une pipe

『これはパイプではない』 豊崎光一・清水正訳、哲学書房、1986年

1976 La volonté de savoir (Histoire de la sexualité, Volume 1)

『知への意志 性の歴史1』 渡辺守章訳、新潮社、1986年

1984 L'usage des plaisirs (Histoire de la sexualité, Volume 2)

『快楽の活用 性の歴史2』 田村俣訳、新潮社、1986年

1984 Le souci de soi (Histoire de la sexualité, Volume 3)

『自己への配慮 性の歴史3』 田村俣訳、新潮社、1987年

1984年 後天性免疫不全症候群（AIDS）にて逝去

2018 『肉の告白 性の歴史4』 慎改康之訳、新潮社、2020年。没後出版(未完)

1954-88 『ミシェル・フーコー思考集成』全10巻、筑摩書房、1998～2002年

『フーコー・コレクション』全6巻別巻1、ちくま学芸文庫、2006年

5章 分類すること

1) 歴史家はどう言うか

P148 上

思想あるいは学問の歴史—その平均値—（エピステーメー）においては、17世紀とくに18世紀に、ひとつの新たな興味が生まれたということにされている。

「生命に関する学問をはじめて発見」

この現象について一定数の原因といくつかの本質的顕現形態を伝統的に人々は算えあげてきた。

原因と動機という側では、観察というものに新たな特権があたえられた

原因

顕微鏡の発明—観察の技術的改良

1660年代以前、イタリア、オランダ、イギリスでは顕微鏡は単なる珍しい器具でしかなかった。イタリアのマルチェロ・マルピーギは顕微鏡を使い、肺を手始めとして生物学的構造の分析を開始した。1665年、ロバート・フックが発刊した *Micrographia*（顕微鏡図譜）は、その印象的なイラストレーションで大きな衝撃を与えた。顕微鏡による生物研究に多大な進歩をもたらしたアントニ・ファン・レーウェンフックは、微生物（1674年）や精子（1677年）を発見した。彼は生涯を顕微鏡の改良に費やし、最終的には約300倍の倍率の顕微鏡を作っている。(wiki)

合理性のひとつのモデルを提供していた物理的科学的の当時における新鮮な影響力

ニュートン 1687年（44歳）『自然哲学の数学的諸原理』プリンキピア

P148 下

実験と理論によって、運動の法則や光の反射の法則を分析することができた以上、より複雑だが隣接している生物という領域を組織化するような法則を・・・探求するのは当然のことでは

デカルトの機械論—機械論的合理性から生物のもつあのべつの合理性へと、人を導いていったとされるのである。

動機

重商主義—農業に対する経済的関心が生じた。 重商主義からの変化（価値の発生）

調査探検の大旅行

それ以前の時代に長いこと放置されてきた土地に金銭と愛情とを「投資」という、根本的理由のさだかでない風潮が起こったこと。18世紀の中葉に、ルソーは植物採集を行っているのだ。

P149 上

歴史家たちは、・・・その指導原理をなしたいわゆる「精神」と記載する。

こうした学問ははじめデカルトの影響をうけて機械論的であり、・・・化学の最初の努力・・・18世紀全般にわたって特権を手にした（もしくはとりもどした）のは生氣論的諸テーマであって・・・「生氣論」として定式化される。

無機物質に対する機械論的法則の支配が認められるようになった後で、生物の特異性を強調する場合に主として用いられる。生氣論者として有名なのはドリーシュであり、彼はウニの発生実験に基づいて、生命特有の原理としてのエンテレキーの存在を主張した。『日本大百科全書』

つねに同一の問題が提起されては、そのたびごとに別の回答があたえられた。

生物分類の可能性の問題（リンネー可能、ビュフォンー不可能）

生殖過程の問題（前成説、機械論的、胚種の独自の発達）

諸機能の仕組みの分析

P149 下

こうして人々は、あらゆる形や運動のうちに神の摂理があり、神意の単一性と神秘と配慮が見られるとする神学と、はやくも**自然の自律性**を規定しようと試みている一個の科学の間の、壮大な葛藤の跡を見出したと**思い込むのだ**。

天文学、力学、光学のかつての優位にあまりにも執着している学問と生命の領域にあるかもしれぬ還元不能で特異なものに気づきかけているもう一つの学問との矛盾をも、**人々は見取**て取るであろう。

最後に、歴史家たちが目の辺りに描かれるのを見ることになる最後の対立はリンネのように自然の不動性（タブロー）を信じる人々

Vs

・・・デイドロとともに生命の偉大な創造力、尽きることのない変形能力、可塑性、それによって生命がわれわれ人間を含めその生み出したすべてを何ものにも支配されぬ時間のうちに包み込むあの偏奇、そうしたものをすでに予感していた人々の対立

ダーウィン、ラマルクよりはるか以前に・・・進化論を巡る大論争が・・・開かれていたというわけだ。

P150 上

機械論と神学とがたえず支え合い、あるいは反駁しあいながら古典主義時代をその起源の最も近くーデカルトとマルブランシュに繋ぎ止めており

1664年にデカルトの遺稿『人間論』に接したのをきっかけに哲学に目覚め、オラトリオ会が帰依するアウグスティヌスの神秘的な思想と理性を重視するデカルト哲学の総合を目指した。(wiki)

反宗教主義と生命についての漠然とした直感とが・・・古典主義時代をその直後の時代、19世紀のほうへと、引き寄せようとしていることになる。

ドゥニ・デイドロ (Denis Diderot, 1713年10月5日 - 1784年7月31日) は、フランスの哲学者、美術批評家、作家。主に美学、芸術の研究で知られる。18世紀の啓蒙思想時代にあって、ジャン・ル・ロン・ダランベールとともに百科全書を編纂した、いわゆる百科全書派の中心人物であり、多様な哲学者と交流した。徹底した唯物論者であり、神について初期は理神論の立場に立ったが後に無神論へ転向した。(wiki)

19世紀は・・・実証的で合理的な生命の科学として完成。生物の特異性、生物とそれを認識する我々自身との間に通い合うひそかな温かみ・・・合理性を犠牲にする必要はなくなったのだと**考えられているのである**。

分類学の試みと顕微鏡による観察という研究を、互いにつなぎ合わせる網目を把握することが困難になる。たんに観察された事実として記録しなければならなくなる。

150 下

知を、一方では人々がすでに別の手段で知っていたもの(アリストテレス、スコラ哲学、デカルト、ニュートン)、他方では人々がまだ知らなかったもの(進化、生命の特異性、有機体の概念)という、二種類の異質な糸の絡み合いと見なさざるをえなくなる。

最も重要なものは、言うまでもなく生命という範疇であろう。

人々は18世紀における生物学の歴史を書こうとする。だが、彼らは、この時代に生物学が実在しなかったこと、150年あまり前から今日の我々にとって馴染み深いものとなった知の截断が、それ以前の時代に対しては意味を持ち得ないことを理解しない。生物学が知られていなかったことには、極めて単純な理由があったのを理解しない。

生命それ自体が実在しなかったということだ。実在していたのは**生物**だけであり、それも、<博物学>という知の格子をどうして姿を見せるものにすぎなかったのである。

要するに問題は類似関係の歴史なのだ。古典主義時代の思考は、語、分類、交換を基礎づけ正当化する、物相互間の相似性ないし等価性の関係について、どのような条件のもとで反省しえたか？ (22-23)

19世紀になると、ラマルクやトレヴィラヌスが「biology (生物学)」という学問名の領域を提案した。(wiki)

2 博物学 (histoire naturelle)

P151 上

今日のわれわれにとっては、「博物学」の自明性ばかりか統一性までもが極めて把握しがたい、いわば混乱したものと見えるのだが、

自然の記述 (histoire de lanature) はデカルト的機械論の没落とともにあらわれたにちがいないと見えるし、またしばしばそう言われてもきた。世界全体を直線運動の法則で律することが不可能だとわかり、動植物の複雑性が延長をもつ実体の単純な形式に十分な抵抗を示したあとでは、自然の不思議な豊かさが明らかになるのは当然のことであった。

デカルト哲学の波が引いたばかりのこの浜辺に、生物の綿密な観察があらわれたとされている。

だが、不幸なことに、ことはそう簡単に運ばない

ひとつの学問が他の学問から生まれることがありえるかもしれない。けれども、ひとつの学問が他の学問の欠如や蹉跌や遭遇した障害から生まれることは決してありえない。(漸進的に進歩していく)

博物学の可能性は、デカルト哲学と同時期のものであって、その蹉跌と時期を同じくするものではない。

P151 下

つまり、同一の<エピステーメー>がデカルトからダランベールにいたる力学と、トゥルヌフォールからドバントンに至る博物学との双方を可能にしたのである。

デカルト (1596年3月31日 - 1650年2月11日)

ダランベール (1717年11月16日 - 1783年10月29日) は、18世紀フランスの哲学者、数学者、物理学者。ドゥニ・ディドロらと並び、百科全書派知識人の中心者

トゥルヌフォール (1656年6月5日 - 1708年12月28日) は、フランスの植物学者である。花の形を基準にした植物分類法を確立したことで知られる。

ドバントン (1716年5月29日 - 1800年1月1日) はフランスの博物学者である。ビュフォンの『博物誌』の執筆にかかわった。

計量することも計算することも説明することも出来ず、ただ描写と記述のみが可能な記述対象としての重みをもつに至るといふ、そのようなことが必要ではなかった。必要だったのは一全く逆に一<記述>がもつぱら<自然を対象とする>ものになることであった。

16世紀、そして17世紀半ばまで実在していたのは、『蛇と龍の話』などの雑録的記録 (イストワール)

そこへ、1657年、ヨNSTONNSが『四足獣の博物誌』を出版する。

出来事というのは<記述>の領域で、今や個別のものとなった二種類の認識が、突如として上澄みと沈殿のように分離することである。

P152 上

<記述>とは、物について観察しうるものと、その物の中に発見されたり、その物の上に置かれていたりするあらゆる記号シーニュ（しるし）とが、全く同一の次元で解きがたくもつれ合う織物に他ならなかった。

<観察>、<記録>、<お伽噺>という、かくも単純で直接的と見える大きな三元的分類は実在しなかった。

つまり、やがて17世紀には表象の様態となる記号（シーニュ）が、当時はまた物の一部をなしていたということにほかならない。

P152 下

アルドロヴァンディ

（1522年9月11日 - 1605年5月4日 イタリアの博物学者、三位一体を否定する信仰を支持したために、異端で起訴）

解剖学的記述、捕獲方法、その寓意的利用法、生殖の様態・・食事とそれをソースで味付けする最上の方法を、いずれも**同じレベル**で書きつらなれている。

ヨNSTONNS

（1603年9月15日 - 1675年、スコットランドを出自とするポーランドの博物学者。著書、『鳥獣虫魚図譜』）

馬の章を、名称、解剖学上の諸部分、生息状態、年齢、生殖、鳴き声、運動、共感と反感、利用法、薬剤としての用途など、十二の項目に**下位区分**している。

アルドロヴァンディには更に多くのものがある。本質的相違はヨNSTONNSにおけるこの<欠如>のうちにあるわけだ。

動物に関する意味論は、・・・そっくり欠落している。解剖学的要素・・死を持つ生身の存在がむき出しのまま現れているのだ。

P153 上

博物学は、語と物との間にいまや開かれたこの隔たりのうちにみずからの場を見出す。

（よくわからない。<お伽噺>が消えたということか。上澄みと沈殿=観察？）

諸要素にしたがって、すでに分節化されている。

物は、表象内部に姿を表す以上、言説（ディスクール）のほとりまではきているのだ。

計算（デカルト的?）を断念したとき観察を始めたのではない。

過去の経験が、否応なしに・・・待機している別の認識への接近を強制したと考えるてはならない。

博物学とは、名指すことの可能性を見越した分析によって表象のうちに開かれる可能性。

<見る>可能性なのだ。

P153 下

リンネが博物学のために提唱した記述の順序

名称、理論、属、種、属性、利用法、そして最後に<文献>だ。

リンネ (1707 年 5 月 23 日 - 1778 年 1 月 10 日) は、スウェーデンの博物学者、生物学者、植物学者。「分類学の父」と称される

時とともに物の上に堆積したあらゆる言語 (ランゲージ) は言説 (ディスクール) がみずからを物語り、種々の発見、伝承、信仰、・・・補遺的な部分として最後に押しやられる。

言語 (ランゲージ) に先立って、物自体がそれ固有の特徴において、・・・実在性の内部において、その姿を見せるのにほかならない。

古典主義時代における自然の学の成立は、他の領域 (幾何学もしくは力学—ニュートン・デカルト?) において形成された合理性の移入から、・・・生じた結果ではない。

記号 (シーニュ) に関する一般的理論と普遍的 <マテシス> の企てに結びついているとはいえ、固有の考古学をもつ、独自に形成されたものなのである。

単純な自然を秩序づけつことが問題であるときには、<代数学> を普遍的方法とする <マテシス> に訴える (p97) こうして、記述 (= 歴史) という古い語はその価値を変え、おそらくは 古代における意味の一つ を回復する。ギリシャ人の思考において、記述者 (歴史家) が <目撃者> であり、自己の視線から出発して物語る人間 だったとしても、われわれの文化においては常にそうだったというわけではない。

記述者がこの役割を引き受け、取り戻すのはかなり後、古典主義時代のはじめである。

P154 上

記述者の任務は、記録と記号の集大成を作り上げることであった。

古典主義時代は、記述に全く別の意味を賦与する。物それ自体に初めて細心な視線を注ぎ、ついで視線の採集したものを、滑らかな、中性化された、忠実な語で書き写すとい意味である。

この新たな記述のための資料は、他の語やテキストや古文書ではなく、庭や押し葉にした植物や蒐集された標本という、物と物が併置された透明な空間 である。非時間的な一つの長方形

P154 下

植物園や動物標本の蒐集は、異国の動植物に対する新たな興味の現れだったと、実際にはずっと以前から関心を注いでいた。

変化したのは、それらが見られ、それらの記述の出発点となる空間である。

ルネッサンス において珍奇な動物は見世物であって、祭り、闘技、現実または架空の闘い、動物物語が無時間的なお伽噺を展開する復元された伝説的過去のなかでであった。

古典主義時代 に設けられた標本陳列館や動植物園は、輪を描いてまわる「見世物」の行列を「表 (タブロー)」のかたちをした展示様式に置き換えたわけだ。

かつての舞台とこの目録とを隔てるのは、知識欲ではなく、物を視線と言説 (ディスクール) の双方に結びつける新たな仕方であり、記述 (イストワール) というものの新たなあり方だったのである。

この空間とこの「自然な」配分法が、18 世紀末に、語、言語 (ラング)、語根、文献、古文書などの分類法、ひとつの記述・イストワール (すなわち歴史) の場全体の成立にとって、どのような方法論的重要性をもつにいたったかはよく知られている。

やがて 19 世紀は、この歴史 (イストワール) の場に、もはや物のあの純然たる表 (タブロー) ではなく、語について語ることの新たな可能性を再発見するであろう。

P155 上

古典主義時代の末に、古文書の保管設備が整えられ、それらが分類され、図書館が整備され、カタログ、類集、蔵書目録が作成されたという事実は、歴史（イストワール）の厚みに対する感性の目ざめというよりは、・・生物の世界におけると同じタイプの秩序を導入する努力を示している。

この分類された時間と碁盤目状に空間化された生成のなかで、19世紀の歴史家たちは、ついに「真実の」歴史（イストワール）、時間の激烈な侵入力を回復した歴史（イストワール）を書こうと企てるのである。

3) 構造

P155 下

博物学は、物と言語（ランガージュ）ともに表象に依存することをその成立条件としている。

博物学とは、まさに可視的なものに名を与える作業なのだ。

それは千年来の不注意が突然終わりを告げたということではなく、新たな可視性の場が、そのすべての厚みにおいて成立したということなのである。

博物学が可能になったのは、・・・自己の経験の場を意図的に制限しようと努めたといえるであろう。

17世紀以来、観察というものは、ある種のもを体系的に除外することを条件とする感覚的認識となったのだ。

伝聞の排除、味や風味もまた排除される。不確実で変わりやすく、触覚もまた・・局限される。

P156 上

明証性と延長の感覚であり、万人に容認されるように対象を<各部分が互いに他の部分の外部にある>ように分析する感覚にほかならぬ**視覚**に、ほとんど独占的な特権が与えられる。

色彩は、ほとんど有用な比較の基礎とはなりえない。

観察・可視性の場とは、他のあらゆる感覚的要素を奪われ、その上灰色の単彩画に変えられてしまった可視性なのだ。

一連の除外条件がここでも経験の領域を制限しており、それが光学器械の使用を可能ならしめた。

P156 下

レンズを通してよく観察しようとするためには、他の感覚や伝聞による認識を断念しなければならない。

光学機器、とりわけ生殖の問題を解決するために、・・・いかにして厳密な同一性を保ちつつ世代から世代へと伝えられるかを明らかにするために用いられたことだどう。

P157

観察するとは、見るだけで満足すること、体系的にわずかな物しか見ないこと、表象のやや混乱した豊かさかのうちで、分析されうるもの、万人に認めらうるもの、だれにでも理解できる名をもちうるものだけを見ること、である。

リンネー「記録すべきものは、数、形、比率、位置である」

同一の個体をまえにすれば、だれもが同じ記述をすることができるだろうし、逆に、その記述をもとにして、だれもがそれに照応する個体を認知できるにちがいない。

P158 上

可視的なもののこの基本的分節化において、言語（ランガージュ）と物との最初の対置は、どのような不確実性をも排除する仕方で成り立つのだ。

四種類の値を取りうる限りにおいて記述可能になる。4つの値を<植物学者>たちはその器官あるいは要素の<構造>と呼ぶ。

数と大きさ——量的な用語で記述

形態と配置——幾何学的図形と比較するか、類似関係

人体はいわば可視性のモデルの宝庫として役立ち、おのずから、見ることのできるものと言うことのできるものとの接合点をなすわけだ。

P158 下

構造は、可視的なものを制限し濾過して、それを言語（ランガージュ）で書き写すことを可能にする。

植物は言語（ランガージュ）の中に転置され、そこにみずからの姿を刻みつけ、読者の眼の前にその純粋な形態を再現する。

P159 上

表象が雑然としかも同時性の形で与えるものは、構造によって分析され、かくて言語（ランガージュ）の線上の展開のうちにすぐにも取り入れうるものとなる。

記述と見られている対象との関係は、命題とその表現する表象との関係に等しい。

前者（記述）は、後者（動植物？）を要素の継起のかたちに系列化したものである。

命題はそれ自体としては空虚であり、一方、分節化されたものはくある（エートル）>という動詞の顕在的もしくは潜在的機能によって結合されぬ限り、まことの言説（ディスクール）とはならなかった。

博物学はひとつの学問

しかるべき根拠をもつ、よくできた言語（ラング）である。（ラングつまり構造か？）

P159 下

この言語（ラング）が命題のかたちに展開される時、それは当然として分節化されたものであり、要素が線上に系列化されたものは、明白かつ普遍的な様態に基づいて表象を裁断するであろう。

（表・タブローでなくなる？）

通常言語（ランガージュ）では、・・様々な様態に基づいて分節化するから、同一の表象が多数の命題を生むことがあるに対して

同一の動物、同一の植物は、表象と言語（ランガージュ）のあいだに構造が君臨する限り、同一の仕方で記述されるのである。

古典主義時代の博物学の全域をつらぬく、<構造>の理論は、言語（ランガージュ）における<命題>と<分節化>の役割を、ただひとつの機能のうちに重ねあわせるのだ。

構造は、可視的なもの場全体を、そのあらゆる値が量的とはいわぬまでも少なくとも完全に明晰でつねに有限な記述によって決定されうる、そうした可変要素の一体系に帰着させるのである。

P160 上

<植物学>がいつの日か厳密に数学的な学問として扱えるようになり、・・・代数学や幾何学の場合のような問題を出すことが許されるだろうと考えていた。

この対象は表面と線によって与えられ、機能や目に見えぬ組織によって与えられるものではない。

動植物は、その有機的統一性においてというよりも、ここの器官の示す可視的な姿。呼吸や体液であるより先に、脚、蹄、花、果実である。

解剖学は、ルネッサンスにおいてもっていた、そしてまたキュヴィエの時代に再びもつことになる、統括者としての役割を、17,16世紀は失っていた。

キュヴィエ（1769年8月23日 - 1832年5月13日）は、フランスの博物学者である。比較解剖学の大立て者であり、古生物学にも大きな足跡を残した。

P160 下

この間に好奇心が減退したからでも知が退歩したからでもなく、可視的なものと言表可能なものとの基本的配置が、もはや身体の厚みを通過しなくなったからである。そこから、植物学の認識論的な優位がもたらされる。

動物の場合には目に見えない多くの本質的器官が、植物では目に見えるため、直接知覚できる可変要素から出発する分類上の認識は、動物の領域よりも植物の領域においてはるかに豊富かつ整合的だったのである。

17,18世紀においては、植物に関心が寄せられたから、分類の方法が検討されたのではない。

可視性の分類空間においてしか知ることも語ることもできなかったからこそ、植物についての認識が動物についてのそれにたいして優位に立たざるをえなかった。

植物園や標本陳列館

古典主義時代の文化にとってのその重要性

P161 上

解剖学的なものや機能を隠し、有機体を隠蔽することによって、種々の形態の可視的な凸凹と諸要素、分散様態、大きさを、真実を待ち受けている眼の前に出現させる。

植物園と標本陳列館は、構造のための書物であり、特徴（カラクテール）が組合わされ類別が展開される空間である。

18世紀末のある日、キュヴィエはパリの自然博物館のガラス容器をすべて持ち去り、それらを壊して、古典主義時代における動物の可視性の偉大なたくわえをすべて解剖することとなろう。

新たな好奇心ではない。西欧文化の自然空間における一つの変動にほかならない。

<記述>の終焉であり、また、目に見えるものの<記述的>な認識を、目に見えぬもの、隠されたもの、原因の<哲学的>認識に対置したとき、ポワシエ・ド・ソヴァージュが理解して意味での<記述>の終焉なのだ

ソヴァージュ 1706年5月12日 - 1767年2月19日）は、フランスの医師、植物学者である

分類に解剖を、構造に有機体を、可視的特徴に内的従属関係を、表（タブロー）に系列を置き換えることによって、やがて新たに<歴史>の名で呼ばれることとなる時間の厚い堆積全体を、白地に黒く刻まれていた動植物の古い平面的世界に投げ込むことを可能にする、そうした何ものか発端なのである。

4) 特徴

P161 下

構造とは可視的なものの指示であり、この指示は言語（ランガージュ）の先立つある種の選別によって、可視的なものが言語（ランガージュ）に書き写されることを可能にする。

固有の名（固有名詞）といったもの以外の何ものでもあるまい。

ところで、博物学が言語（ランガージュ）となるためには、記述が「共通の名」（普通名詞）となることが必要である。

すでに見たように、自然発生的な言語（ランガージュ）においては、個別的な表象のみに関わる最初の指示名称が、動作による言語（ランガージュ）と原初の語根のうちにその起源を見出したのち、転移の力によって次第に一般的価値を獲得していった。

博物学はよくできた言語（ラング）である。

P162 上

博物学は、自然の諸存在をすべて明確に指示すると同時に、他の物との比較と区別とを可能にする同一性と相違性の体系のうちに、それらを位置づけなければならない。博物学は、確実な<指示>と制御された<転移>とを一挙に行うべきである。

構造の理論が分節化と命題とを互いに重ねさせたのと同じく、<特徴>の理論は、指示をおこなう値とそれらが転移する空間とを一体化するものでなければならない。

特徴の設定は容易であると同時に困難である。

博物学が、・・すでに記述のうちに展開されている言語（ランガージュ）を、この体系の基礎とするからだ。命名は、見えているものを出発点とするのではなく、構造によってすでに言説（ディスクール）の内部に移された諸要素を出発点。

P162 下

ただちに大きな困難が立ちはだかる。

自然の諸存在すべてのあいだに同一性と相違性を設定するためには、・・・一つ一つの特質を考慮しなければならない。・・際限のない仕事

この困難を回避し比較の作業を限定する何らかの技法

ア・プリアリに2つのタイプ

<方法> 経験的に成立した群の内部で全面的比較を行うことである。

<体系> 有限個の、・・その恒常性や変化をすべて研究すること。

P163 上

自然に対する2つの根本的直感の葛藤のうちにあるのではない。

博物学を言語（ラング）として成立させる二つの仕方のあいだでの選択をこの点において可能かつ不可欠なものとした、必然性の網目の中にあるのだ。

<体系>

諸要素のうち特権的な、実をいえば排他的な構造を規定する

P163 下

特権的構造に関係ないすべての相違や同一性を故意に無視する以上、体系はそもそも出発点において恣意的なものだ。

少なくとも植物界なり動物界なりのいくつかの領域で人為的体系を確立した後でなければ、自然に合致した体系に到達することはできない。

P164 上

その上体系は相対的なものであって、任意の正確度をもって機能する。

トゥルヌフォルは花と果実の組み合わせを選んだ。

他の3つの部分（根、茎、葉）から借りた要素は、その全部を扱うとすれば多すぎ、別々に考えるとすれば少なすぎる。

リンネの計算、それぞれ数、形、位置、比率という4つの可変要素をもつ38の生殖器官は、属を規定するのに十分な5,766の布置を可能にする。

P164 下

かくして、動植物界の全領域は碁盤目状に区分され、それぞれの群に名が与えられであろう。

一つの種の完全な名は、設定されたすべての特徴の網目をとおして最高次の分類階級にまで及ぶだろう。

植物は、それ自身を示す固有の名（固有名詞）とともに、みずからそこに宿っている共通の名（普通名詞）の一列を受け取るわけだ。

こうして博物学は「配列及び名称づけ」という基本任務を完了するのである。

P165 上

<方法>

方法は要素を次々と詳述していく

任意に選んだ、あるいはたまたま最初に出会った種から出発する。

この種のあらゆる部分を残らず記述していく。第2の種についても反復する。最初のとおりと同じように全面的でなければならない。ただ最初の記述で言及されたどのようなものも決して記述を繰り返してはならない。

以下同様に際限のなく反復する。

その結果、最後には、あらゆる植物の異なる特質が一度だけ言及され、しかも二度以上は決して触れられぬこととなる。

実在する種の数が多いにも多いため、すべてをこのように扱うことは可能ではあるまい。

しかし、すでに扱った種を検討してみれば、そこにいくつかの大きな「類」が実在することがわかる。

P166 上

際限のない操作を避けるためには、手順を逆転しなければならない。

明瞭に認知される大きな類をそのまま受け入れて、その共通の特性を積極的に承認するのである。

P166 下

方法は一つしかありえないが、体系は極めて多くの種類が考えられ、・・アダンソンは65種類の体系を定義した。体系は終始一貫して恣意的だが、可変要素の体系（特徴）を決められると、それに変更を加えることも、要素の追加や削除を行うことは許されない。

方法にあっては、経験的に決定された一般的特徴についても必要な修正を加えることができる。

P167 下

このような相違があるとはいえ、体系と方法とは同一の認識論的台座の上に立っている。

それを一言で定義するには、古典主義時代の知において、経験的個体の認識は、可能な限りのあらゆる相違性を通覧させる、連続的で整然たる普遍的な表（タブロー）の上でしか獲得されなかったといえよう。

16世紀においては、動植物の異同はそれらのもつ積極的な標識によって示された。

P168 上

それぞれの朱はそれ自体によって自己を示し、他のあらゆる種とは無関係に自己の個別性を言表していた。

17世紀以降、記号はもはや同一性と相違性に基づく表象の分析のうちにしかありえなくなる。

同一性とその標識は、相違性を引き去った残余によって規定されるのである。

P168 下

例えば無脊椎動物は、もはや単に脊椎をもたぬことで定義されるのではなく、ある種の呼吸様式や循環様式の実在と、積極的統一対を描き出す有機的凝集力の全体とによって定義される。

博物学の本質をなす基本的問題としての分類は、歴史的に、しかも必然的に、<標識>の理論と<有機体>の理論との中間に位置していたのである。

5) 連続体と天変地異

P168 下

博物学はよくできた言語（ラング）だが、このよくできた言語（ラング）の核心にはまだ一つの問題がのこされている。

構造を特徴に変換することは不可能

固有の名（固有名詞）は決して共通の名（普通名詞）とはなりえない。

新たな個体や種に出会うたびにあまりにも多様な要素が記述されれば、共通の名を作ろうとするあらゆる試みははじめから破綻をきたすだろう。

P169 上

さまざまな種の配列を可能にする相違性の一般的秩序は、相似というもののある種の働きを前提としているからだ。

言語（ランゲージ）において普通名詞が可能になるためには、物相互の間に直背的類似がなければならず、その直背的類似のおかげで、能記となる要素は、物の表象に沿って走り、その表面で変位し、その相似点にまといつき、かくしてついには多数の物に適用しうる指示名称を形成することができた。

ただこの類似が想像力に充分な力を貸し与えるというだけで事足りたのだ。

P169 下

連続的な自然というこの要請は、体系と方法においてまったく同じ形態をとるわけではない。

「体系はそこで言及されていない植物をも示す。目録による列挙ではこれは不可能である」

「特徴が属を決定すると思ってはならない。属が特徴を決定するのだ。」

P170 上

方法においては、自然の連続性は、ひとつの積極的要請となるであろう。

自然の全体はいわば大きな織物を形成。

隣接する個体同士は限りなく類似したものでなければならない。

P170 下

18世紀における博物学のいずれの流派にとっても、自然の連続性は不可欠の要件

この連続性のみが自然の反復性を保証し、構造の特徴への変換を保証するのである。

経験が・・個体、変種、種、属、綱の連続体を正確に一步一步踏破していくことができるなら、とくにそのために学問を成立せしめる必要はなく・・・物の言語（ランゲージ）がおのずから学問的言説（ディスクール）となるであろう。

P171 上

博物学は無用のものとなる。

人々の日常の言語（ランゲージ）によってすでにつくられていることになるであろう。

一般文法が同時に諸存在の普遍的<分類学>となるわけだ。

けれども・・博物学が要求されるのは、経験が自然の連続性をそのまま与えないからである。

われわれの住んでいる地球上の現実の地理的空間においては、諸存在がたがいに錯綜しあっており、そこにある秩序は、<分類学>の大連続面に比べれば、偶然、無秩序、混乱というほかないのである。

この錯綜した状態は、時間的継起における一連の出来事の結果にほかならない。

P172 上

これらの一連の歴史的出来事（大変動）は、諸存在の連続面にあとから付加されたものであり、固有のものとしてそれに属するものではない。

P172 下

博物学が学問として実在するためには、二種類の総体が前提とされる。

ひとつ、諸存在の連続的網目、この連続性はさまざまな空間的形式をとることができる。

P173 上

それぞれの仕方で分類学的連続性を描き出すこれらの空間的布置を区別されるものとして不連続的な仕方で生起し、その生み出す挿話は、その総体で時間の線という一本の単純な線を描かずにはおかない。

自然全体は、その具体的形態と固有の厚みにおいて<タクシノミア>の連続面と大変動の線との間に宿っている。自然が人間の目の前で形成する「タブロー」

学問の言説（ディスクール）が踏破する任務をおびた「タブロー」

それは、生物種の大きな平面が、分断され、かき乱され、時間の二つ反乱の間で凝固したものにほかならない。「不変論」と「進化論」を対置するのが、表面的であるかがわかるであろう。

P173 下

種や属の空隙のない網目の堅固さと、それをかき乱した一連の出来事とは、いずれも、おなじレベルにおいて、古典主義時代に博物学のような知を可能ならした認識論的台座の一部をなしている。

古典主義時代の思考のなかには、進化論あるいは生物変移説の気配すらない。

なぜなら、時間は、その内的組織における生物の発展原理とはけっして考えられず、それらが生息する外的空間に起こりえる変動としか知覚されなかったからだ。

6) 畸形と化石

今日われわれが進化論的思考という名によって理解しているものとは相容れない。

7) 自然の言説(ディスクール)

P180 下

博物学の理論は言語（ランガージュ）の理論と切り離しえない。

知のある基本的配置によって、諸存在の認識が、それらを名の体系のなかで表象する可能性にしたがって秩序づけられているということだ

P181 上

われわれが今日「生命」と読んでいるこの分野

分類の努力以外の多くの探求、同一性と相違性の分析以外の多くの分析があった。

一種の歴史的ア・プリオリに基づいている。

前の時代に蓄積され、むらや遅速こそあれ合理性が増大するさいの地盤となるような、認識のある種の状態から出来ているものでもない。

物に関して真実と認められる言説（ディスクール）を述べうるための諸条件を規定するもの。

18世紀において、種の実在、種の安定性、世代から世代への特徴の遺伝に関する探求や論争を基礎づけていた歴史的ア・プリオリこそ、ある種の自然記述の実在にほかならない。

P181 下

古典主義時代における博物学は、好奇心の新たな対象の単なる発見に照応するものでもなく、表象の一総体のうちに恒常的秩序の可能性を導入する一連の複雑な操作に対応している。

それは、経験性の一領域全体を<記述しうる>と同時に<秩序づけうる>ものとして成立させるのだ。

19世紀以来、われわれが生物学という言葉で理解しているものから区別し、博物学に、古典主義時代の思考においてある種の批判的役割を演じさせるものなのである。

博物学は言語（ランガージュ）と同時のものだ。

記憶のなかの諸表象を分析し、それらの共通要素を見さだめ、そこから出発して記号（シーニュ）を設定し、そして最後に名を与えるという、自然発生的な操作とおなじレベルに属している。

分類することと語ることは、どちらも、表象が時間、記憶、反省、連続性とかかわりを持たざるをえぬゆえに自己の内部に開く、あのおなじ空間に起源の場を見出すのである。

P182 上

自然発生的な「できの悪い」言語（ランガージュ）では、4つの要素（命題、分節化、指示作用、転移）がそれぞれのあいだに空隙を残している。それ故・・いく百もの異なる言語（ラング）が生じたのだし、語形ばかりでなく、何よりも語が表象を截断する際の仕方によって区別されるのだ。

博物学はよくできた言語（ラング）

記述の正確さ、あらゆる命題が現実の恒常的な截断となり、・・それぞれの存在の<指示>がそのまま正当な権利をもって全体の一般的<配置>のなかでその存在の位置を示すときであり。

言語（ランガージュ）においては、動詞の機能は普遍的で空虚なもの。